

第66回 ノンビブラートで聴かせた いしだあゆみの音の景色

今年の1月4日、有料放送の日本映画専門チャンネルで、かつてNHKで放送された松本清張原作の推理ドラマ『最後の自画像』（昭和52年版）が放映されていました。失踪男性の不倫相手役として、いしだあゆみが出演、正面を見つめているにもかかわらず視点の定まらない彼女の演技が秀逸で、あらためて女優としてのいしだの魅力を認識した次第です。昭和50年代に入った頃から、歌手としてのいしだの印象が薄くなったことを考え合わせると、このとき演じた役も歌手から女優へのターニングポイントの一つだったのかもしれない。NHKにもかかわらず、劇中に登場するアルバムに貼られたモノクロ写真でセミヌードを披露しているのは、当時29歳だった彼女なりの決意の現われだったのでしょうか。

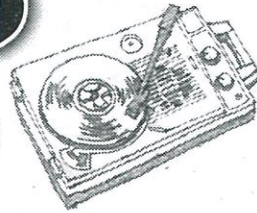
私がいしだの存在を知ったのは森繁久彌や松山英太郎、悠木千帆（後の樹木希林）らと共演したテレビドラマ『七人の孫』で、彼女はまだ十代半ばの美少女でした。すぐにレコ

ード歌手としてもデビューしますが、テレビドラマ『アツちゃん』の主題歌などのファミリーソングを歌う清

名曲カルテ

昭和歌謡と いまでも

堀井六郎
絵・松本浦



純派のイメージでした。

そして昭和43年、20歳になった彼女はビクターからコロムビアに移籍、大人の流行歌手として再デビューします。『涙の太陽』を誕生させたコロムビアの名ディレクター泉明良が、おそらくは同系統の曲作りを依頼したのでしょう。『太陽は泣いている』が誕生します。GSのオックスが3枚目のシングル盤『スワンの涙』をリリースしたのと同時期でした。

GS風の同曲はいにく大ヒットには結びつきませんでした。ここにいしだは、ヴィレッジ・シンガーズ、オックス等への提供曲でGS中期を支えていた作詞・橋本淳と作曲・筒美

京平という黄金コンビに出逢います。

そして同年末、このコンビによって提供されたのがシングル第3弾『ブルー・ライト・ヨコハマ』でした。この歌の歌詞は恋愛が成就して幸せに浸っている女心を描いています。通常『ブルー』は悲観的な要素を含んでいるので歌詞の内容とは裏腹なのですが、橋本はすでにその前年に『ブルー・シャトウ』で前科を犯して、自らのラッキーカーラーにあやかっただのかもしれない。

昭和歌謡を代表する大ヒットとなった『ブルー・ライト』は翌年のレコード大賞作曲賞を受賞、作曲家・筒美京平の快進撃に拍車がかかった名曲でもあります。この後、昭和40年代が終了するまで、いしだと筒美の蜜月関係は続き、数々の佳曲が生まれました。

筒美が曲を提供したスター歌手はそれこそ星の数ほどいますが、ノンビブラートで声に特徴のあったいしだあゆみと平山三紀（現・みき）は特別な存在だったのでしょう。

筒美がいしだに提供したシングル盤を追いかけていくと、そこには「昭和歌謡」という鮮やかな音の景色が見事に描かれていることに気づかされるのです。